

令和3年度 中学生の「税についての作文」

柏市長賞

「「目に見えない資源」に形を変えて」

芝浦工業大学柏中学校 三年 横田 咲季

学校課題の一環で新聞を読んでいた時に、「ODA」という聞き慣れない政策に税金が充てられていることを知った。「ODAって何だろう。」そう思って調べてみたところ、開発途上国に対して、公衆衛生、学習環境の整備や貧困家庭への支援など、資金提供や技術協力を行う事だと分かった。

日本は制度開始からこれまでに約六十七兆円の予算をODAに使ってきた。世界でもトップクラスの拠出額といえよう。

ここで大きな疑問が湧いた。確かに様々な困難を抱えている外国の人達を助けることは、大事だ。しかし、日本国内に目を向けると、医療費や年金などの社会保障費の増大、最近ではコロナ禍による就業問題や子供達の学習環境支援問題など、解決すべき課題は多く、おそらく予算が足りている状況にはないだろう。国内の課題を解決することが優先なのではないだろうか。ODAの予算など要らないのではないかと思った。

ところが、こんな疑問など簡単に吹き飛ばしてくれる興味深い記事を見つけた。それは、今から約十年前前、私はまだ幼稚園に通っていた頃の東日本大震災に関するものだ。

それによると、震災と津波の影響で被災し、混乱と不安を抱えながらの生活を余儀なくされた東北地方の人々に対して、食料品や義援金のみならず、支援チームや応援メッセージなど、百六十三の国と地域から支援の申し入れがあったそうだ。この支援は、日本にとってどれほど励みになったであろうか。

この中には、日々困難な生活と隣り合わせの開発途上国からのものまで含まれていた。日本が長年にわたり、支援や協力を積み重ね、築き上げてきた信頼の賜物だろう。

日本は資源が少ない国だと言われている。石油や鉄鉱石などの鉱物資源、大豆やトウモロコシなどの農産品、コーヒー豆や紅茶などの嗜好品など、輸入に頼らなければ私たちの生活は成り立たない。これらを仮に「目に見える資源」と考えるならば、確かに資源は少ないと言える。しかし、ODAを通してこれまで行ってきた支援や協力は、信頼に形を変え、「目に見えない資源」として日本を支えてくれていたとも言える。この資源は決して少なくはないだろう。東日本大震災後の各国からの支援が、まさにその裏付けではないだろうか。

外国にお金を使うなんてもったいないと思っている人もいるかもしれないが、「情けは人の為ならず」ということわざもあるとおり、回り回って私たち自身に返ってくるものではないかと思う。地球温暖化など地球規模の課題には、世界全体で取り組まなければならない。意見の違いを解決に導くには何よりも信頼関係が不可欠だ。だからこそ、「目に見えない資源」をフルに活用して、持続可能な世界を未来へとつないでいきたい。